2018年　5月27日 掲載原稿

シリーズ いばらき発見 ⑭

鰐ヶ淵（わにがぶち）のみやげ

――大子町

昔、久慈川の近くで年老いた父親と息子が暮らしていました。父親は体が弱く、息子は川で釣った魚を売りながら生計を立てていました。

ある日、息子が魚を釣っていると、昔から天狗のすみかだと言い伝えがある鰐ヶ淵（大子町）まで来ていました。不安になったものの、大きな魚を釣ることができたので、次の日から息子は鰐ヶ淵で魚を釣るようになりました。

ある時、家に戻ろうとした息子の目の前に真っ赤な顔の天狗が現れました。

「この鰐ヶ淵はおらのもんだ。釣った魚はおいていけ」

息子が断ると、怒った天狗が羽うちわで殴りかかってきました。抵抗しているうちにうちわが、鰐ヶ淵のうずの中に沈んでしまいました。うちわをなくした天狗は、神通力もきかずとぼとぼと、どこかへ行ってしまいました。

再び、天狗がいなくなった鰐ヶ淵で息子が釣りをしていると、淵の中から白いひげと白い服の老人が現れました。鰐ヶ淵の主と名乗る老人は、

「悪い天狗を退治してくれたお礼をしたい」

と、息子を淵の底へ招待し、もてなしました。五日目になって父親のことを思い出し、帰ろうとする息子に老人はお礼だと言って願いがかなう小づちをくれました。

帰ってみると、五年の月日が経っていました。父親や村の人たちはたいそう喜びましたが、しばらくして父親は息子が帰りほっとしたのか、ぽっくり死んでしまいました。

「貧乏ぐらしじゃ、葬式も出してやれねえ」

そう言って泣いていた息子でしたが、ふと鰐ヶ淵の老人からもらった小づちのことを思い出しました。

「とっつぁまの葬式、りっぱにやらしてけろ。それ、それ、それ」

と、小づちを三度振ると、あっという間に広い家ができ、葬式の膳やごちそうが出て来て、葬式をあげることができました。

それからというもの、息子は村の人が困っている時には、うちでのこづちを振って助けてやりました。そして、いつしか「長者さま」と言われるようになったそうです。

新緑あふれる木々の合間からこぼれる優しい光や風の香りが心地よい季節になりました。思い返せば、誰しも一度はひょんなことから幸運に結びついたことがあるのではないでしょうか？その幸運を、ほんの少し誰かにおすそ分けすることができたら、世界はちょっとだけ優しいものになるかもしれませんね。

〈参考文献〉茨城県の民話（日本児童文学者協会編）

「運ぶ」を支え、環境と未来をひらく
ISUZU 茨城いすゞ自動車株式会社
本社／〒310-0063 水戸市五軒町1-2-5 ☎029-225-1215(大代) http://www.ibaraki-isuzu.co.jp

いきいき茨城ゆめ国体2019
を応援しております。